

草森紳一氏からその勞作「室町時代の李賀」(レジュー)と「時代 李賀關係資料彙編」(『藝文研究』第二十七号)を贈られた。初見のものがかなりあつて大いに教えられた。ところどころには見えない六如上人釈迦庵の「題李長吉像」李長吉の像に題す、を紹介する

上帝巨靈吹洪爐

金鑄賢智土團愚

中有一金寧蹠躍

帝惡不祥棄泥塗

化爲李家好兒郎

七歲文名動帝鄉

騎馬從奴朝朝出

喧出心肝滿錦囊

上叩天闕下地戶

鬼入筆端造化忙

控掣六龍神山徙

鑿開七竅渾沌死

帝不能堪莫汝猶

天帝さまはでかいふいごでごつい爐をお吹きになつて
金からは賢人智者、土からけ愚物をおつくりなさる
中に一つの金のかたまり、むやみやたらにはねるので
天帝さまはえんぎがわるいとぬかるみにお棄てなされた
そいつの生れかわってきたのが李なるおうちの坊やでござる
七つの年には詩をつくりその名が天子の部けるがす

ロバにのり童子をつれて朝々出かけ

心臓をはき出して作った詩句が錦の袋にいづいじや

上げ天国、下け地獄の罪をたたき

思いは筆にほとばしり万物創造にいそがしい

六匹のすっぽんをしょっぴいてきて神仙の山をうごかし

七つの穴をこじあけて渾沌も殺してしまう

天帝さま そのやんちやにはがまんがならず

忍教書著削膳仕
侮弄化極雖難秉

母乃冥天太少恩

茫茫九州九復九

宣矣萬古多土偶

むじたうしや 神をけずってその命お奪いなされた

造化の力テクリあなたどつてもあそぶのは許せぬことではあるけれど

お天道さまもいつもしみ少なすぎるじゃうじうぬか

茫茫九州九また九

むりもない 萬代 デクの多いのも

慈鳳、俗姓苗村氏、六如けその字。近江の人。桜町天皇・吉宗將軍の元文二年(1736)に生れ。天
和宗の僧となり。はじめ武藏の明静院に住し、晩年、京都嵯峨の長床坊に退隱し、光格天皇・家
齊將軍の享和元年(1711)に死んだ。菅茶山となるが漢詩人として知られ『六如庵詩鈔』六卷、同二
編六卷、同續編三卷、『葛原詩話』四卷、同後編四卷がある。

わたしは『六如庵詩鈔』をもため。やきの詩は、清の俞樾の編んだ『東瀛詩選』卷三十七を読
んでいて見つけたので、それけ昭和三十八年の春頃の文だった。俞樾は慈鳳を慈舟とする。小伝
に「詩僧中の傑出する者」といふ「詩に則ち古艶にして蘆荀の氣なし」という。

「牛鬼蛇神」「驟霧天物」「無補於用」「李賀其妙乎」「宛如小說」……李賀に対する批評は
唐代から清朝にいたるまで、バケモノあつかいである。読まなくてはバケモノあつかいしておけ
ばそれが見識として通つた。わが江戸の詩人・学者の間でも、やうした氣味があつたようである。
その中で、慈鳳の右の詩はずば抜けている。形而上詩派のものに似た witty conceits も面白いが、
李賀詩の本質を一拳に把握してそれを端的に表現している点がすばらしく。終りの四句などは賀

の久怨をはうすものとい、てもよい。

慈周の時代は中国では清の乾隆・嘉慶のころにあたる。李賀研究が盛んになった時代だ。だが江戸ではまだ明の文壇の影響下にあって、文は古文、詩は初盛唐までというスローガンがはばをきかせていたらしい。中晚唐の詩を自分の歯でかみわける人はそつ多くはなかつたろう。

「室町時代の李賀」は五山の僧の詩文から李賀關係のものを摘録したしだが、その大部分が李賀に好意的であるのも興味ふかい。これは十分に掘りさぐる価値のある問題である。

いずれにしても儒者や専門詩人の間でよりも僧侶の間に愛読者を多くもつたことは、李賀にどつても不名誉ではあるまい。保守的な人の多い今の僧侶のことと思いつかべて、人はわたしのことはをいぶかるかもしれないが、当時の僧は戒・定・慧の三学に努力して、名声こそあらわでないけれども、儒林・文苑の鋒々たる人たちに決して劣らぬ者を輩出し、その思想は時代よりもはるかに前を進んでいたらしいのだから。

(昭和辛亥九月九日)

八 雜記・30 V 雜 歌 繞 儒 紋

李賀の「潞州張大老病酒遇江陵寄上十四兄」潞州の張大が老にて酒に病み、江陵に遇つて十四兄に寄せたてまつる。はわたしの殊にすき方詩のひとつである。

秋至昭聞後 謂聞に秋至りなげ
當知慈國寒 趣の地の寒き知るべし
繫書隨短羽 暫がねに一とづけむ文

寫恨破長牋
病客眠清暎
疎桐墜綠鮮
城鶯啼粉堞
軍吹慙蘆煙
岸情寒紗幌
枯塘臥折蓮
木牕銀跡畫
石磴水痕銀
旅酒侵愁肺
離歌繞懦絃
詩封兩條冰
露折一枝蘭
松乾老沙泣
瓦獸殘沙老
覺騎燕地馬
夢載楚溪船

ながと悲しげ
われ病みて曉に眠れば
桐の木や縁をみると
ひめがきに鷄はさやぎ
壹むらにひびく角笛
頭巾つけとばり間けば
涸れし池に蓮折れふす
木窓にはひろ這じしあと
石きだに濡れし錢ごけ
旅の酒肺にしみ
離れの歌絃になづか
詩にこめぬふたすぢ
す、露に折る蘭
詩にこめぬふたすぢ
め、松乾かげに老へ
れて瓦いてのひとくき
め、ては蒸氣のはの
楚の船うけめ
そのころおりすだき

椒桂傾長蘿
鱸鯈斫玳瑁
制龍船鵝絨
江齋無世用
江齋之曲也。雖
然少，かなむしに濃やか。

3133 (20777)

結びの回りに難解で、せんわかに「V」、「N」が並んで、歌謡、舞謡
の音響を表現してたゞ二種だけの歌。今田・秋原・秋葉・藤野・織田・
江口作んだ。

アーヴィング・トーマス・ハーティング「ムーンライド」
アーヴィング・ムーア「ムーンライド」。The languid strings do scarcely move! /
The sound is forc'd, the note are few! 152 "To the Muses", ルード・ムーンライド
アーヴィング・トーマス・ハーティング「ムーンライド」。

Whether on Ida's shady brow, / Or in the chambers of the East, / The chambers of the sun, that now
From ancient melody have ceased; // Whether in Heaven ye wander fair, / Or the green corners
of the earth, / Or the blue regions of the air / Where the melodious winds have birth; // Whether
on crystal rocks ye rove, / Beneath the bosom of the sea / Wandering in many a coral grove
Fair Nine, forsaking Poetry! // How have you left the ancient love / That bands of old enjoy'd
in you! / The languid strings do scarcely move! / The sound is forc'd, the notes are few!

全体を読むと、中国の詩とイギリスのそれとの違いの方が際だってきて、初めに感じたほど質の句に引きよせて考えてよいかどうかに、ややためらう。しかしやはり似ていて、そうして両方ともに全体から切りはなしても自立するほどしっかりした詩句であるところが共通するよう感覺される。

エリオットの読んだブレイクはサムソン校注本だからわたしのと同じものだろう。四五〇ページの中からこの二行を引くのが、もし李賀の集を読んだら「旅酒漫愁肺・離歌繞懷絃」にきっと目をとめただろう。

唐誠眞『李賀論』(一九七一年・香港・文海書屋)の自序によると J.D. Frodsham : *The Poems of Li Ho* がオックスフォードから出ているらしい。(早速註文したがどうやらすでに品切れらしい) ブレイクを愛しエリオットを嗜むイギリスの讀書人は、あるいは東洋の君子國の讀書人よりも早く、李賀の詩をおのれの感性の秩序に組みこむだらうか。

(昭和辛亥九月十日)

▲ 雜記 31 ▼ 稲田尹「李長吉の生涯」

士江澄男氏から雜誌『臺大文學』第五卷第二號を贈られた。昭和十五年五月、台北帝國大學内台大文學會編集發行のもので、その五一一セセページが、稻田尹「李長吉の生涯」である。わたしが昭和三十年前後に何かの目録でこれを知り、それから数年後に上尾龍介氏からも聞いた記憶がある。しかしこの記憶はたしかではない。とにかく、長い間、読みたいと思いつながら読めずいたものを、思いがけぬ喜びを与えた。

朱自清「李翼年譜」をたて系に、賀の詩をよこしに織りこんだものだが、著者の賀に対する傾倒の情が、しつかりと経緯をたたきこんでいて、古色を帯びたつづれ織りの感じである。錦囊詩人の伝記としては見のがすことのできないものであろう。

草が「姉には冷やかであつた」「年十七ハの頃、長吉は妻を迎へた」といふた断定には問題があるが、鋭い指摘が次々にちりばめられている。いまではあたりまえのこととして受け入れられる一ことでも当時は奇異とされたらうものがあり、今日さらに検討をせまられる問題もある。その二三を左に抜く。

* 世上の英雄もど主なきが如く、眞正の詩人は本質的に孤獨である。彼には數人の心を許した友はあつたけれども、交友のうちに己を没することは断じてなかつた。

* 長吉はこの愛しき妻を人間として愛した。それと共に妻の生活を詩人の眼でみると忘れなかつた。その生涯を通じて、長吉は盡し戀愛しなかつたものの如くである。彼が心を許した女は妻であり、彼が女の美に眼を開いたのも妻である。しかも女の美の觀察はその妻に終つた感がある。

* 輓愈けこの諱辯に於て……その言論は痛烈を極めてゐる。／然しそう救はれたのけ輿愈自身に過ぎぬ。

* 一説に長吉け輕薄を以て時輩に非せられたとあるが、輕薄とは要するに地をかへれば時流に撮んでてみるの謂に他ならぬ。

* 藩山向ぞそれ悲しき、鬼雨空草に灑げり。これは波の詩の一章であるが、私は何人の哀悼歌にもましてこの二句が長吉の死を哀悼するに適しいと信じてゐる。

わたしは稻田氏についてはほとんど何も知らぬ。『鹿児島大学文科報告』四に「王謝の系譜」を発表しておられる稻田寺氏がその人なのであろうか。どうだとして、右の文の後にも李賀について書いておられるのだろうか。

△ 録記・32 ▽ 永田調兵衛 祇遣・続

永田調兵衛（拙稿「和刻李長吉詩集」参照）につき永田宗太郎氏から、七月十日付手紙と十一日付はぎきで秉に教示された、感謝する。その要約を左にかかげる。

林道春邸は第小路新町北入東側で、永田家は第小路新町西入南側ゆえ、永田家は林邸の横町にある。

本屋行事は、本屋組合の組合長ではなく、幹部が理事にあたり、三名（？）あり、その時の三名が一番ニ番三番となり協議制と思われる。

丁字屋西村九郎右衛門は初め五条病院町（大橋の西）にあり本家で、丁字屋長兵衛はその西にあった分家か別家らしい。当時の板本の奥書に住所がある。

永田調兵衛が東西南北に土蔵をもつたのは九代目の時で、古事記が大ベストセラーとなり、大本小本再版等もあり、永田家の最も盛大な時だった。小学^校立に功があり中年寄（学区長）となり、日本全国の長者番付にしに入る。十代目は病身だったが永田家の歴史を調査した。

博文館の成功で本屋の店名に館をつけることが流行し、東京では宝文館・北隆館などができる。京都では丁字屋西村九郎右衛門が該法館、丁字屋西村七兵衛（分家）が法藏館、永田の別家の沢田文崇堂が法文館を、それぞれ名乗った。

平樂寺書店村上勘兵衛も元和のころの創業で、村上氏から平樂寺書店をついだ井上氏は、沢田法文館の別家の入である。出雲寺松柏堂林氏は林森山の親戚にあたるが、三代永田氏と親戚（姻戚？）となつた。出雲寺家と村上家ともまた親戚（姻戚？）である。

古い時代の市会議員は名譽職で選舉費に相当使つたもので、十一代調兵衛の弟（宗太郎氏の父）が、木板の重なものを処分した費用を使つた。（前記拙稿に「板木や木口」と記したが、本の方は外今対象にならなかつたようである）。なお大正十年に木板と本の売立てを行なつた。九代調兵衛は明治三十年十二月二十九日死去、八十五歳、諱法院宗空清誉淨勝居士。十代調兵衛は明治二十八年九月十一日死去、五十八歳、道德院常譽宗光西宗昌士。（辛亥九月十二日）

▲ 稲記・33▼ 宮板李長吉歌詩の藍本など

「官板・李長吉歌詩」の藍本と黄光校「李長吉詩集」につき、荒井建氏が八月十日消印のはがきで示教された。それによると、内閣文庫に江戸初期（？）の古写本の昇正子注本があり、官板の缺泐の箇所と墨で塗りつぶした部分が一致するほか、全体の体裁も同じで、これが官板の藍本だろうと推測される。

黄光校本は、各行が木筋でも並べたような形になつてゐる一風変つた版式のものの由。なお、

氏も、黄光序を巻頭におく李長吉詩集を持つておうれ一冊だが完本だそうである。(九月十三日)

△雜記・34▽ 雜記・16 付記

李賀と三島由紀夫につき、草森紳一氏が七月六日消印の手紙で示教された。それによると、三島が読んだ李賀は荒井注であり、林房雄との対談にも荒井注を手もとに用意して臨んだそ�である。荒井注は昭和三十四年(一九五九)に出、「仮面の告白」は昭和二十四年に出ているから、「仮面の告白」に李賀の影響を考える「ことは無理なようである。

(辛亥九月十四日)

二〇世紀の李賀

(一)

おわりとはじめ

吳汝綸

一九〇一年は、わが明治三十四年で、中国では清の德宗の光緒二十七年である。一八九九年五月、山東省に起つた義和団事件は、清国を諸外國との対立關係におき、一九〇〇年十一月、李鴻章が列国と交渉し、十二月、諸和約が成立した。

二〇世紀の第一年を清國は、列国への謝罪から始めなければならなかつた。東アジアに長く君臨した大帝国は、このとき完全にその実を失つた。なお皇帝はその位にあり、國家は國家として

そこにあるたけれども、形骸にすぎず、人々はみずから世界の崩壊をまのあたりにしながら、とにかく前へ前へと押されるように歩いてゆく行かなかつた。

一九〇三年、吳汝綸が死んだ。六十四歳だ、た。かれは、字を學甫といい、安徽省桐城の人で、一八四〇年に生れ、一八六四年の舉人、次の年に進士となり、内閣中書を授けられ、古文にたくみで、曾國藩・李鴻章の幕客として、奉議を担当し、直隸州知州、京師大學堂總教習などの官につき、日本に遊んで教育制度を視察した。後、病と称して引退したという。著述も少くないが、その中に『李長吉詩集四卷外集一卷』がある。わたしが「昇評本」とよぶところのものである。閻生なる人が跋を壬戌四月に書き、雲龍山民張伯英なる人が「李長吉詩評注」と題簽を揮毫し、壬戌六月十有三日と日付を入れている。壬戌は一九二二年、民国十一年、わが大正十一年である。
吳氏が、この評注を著したのが、一九〇一年からその死の年までの数年であつたのか、あるいはその以前であつたのかは、わたしにはわからぬ。けれども、かれは十九世紀の中国に生き、その世紀の教養をもつて賀の詩を評注し、十九世紀中國の終りを見とどけて死んだ人であることは間違ひない。賀の詩の注釈が以後の半世紀に及ぶるもの、象徵的である。

梶鏡花

一九〇六年十一月、日本の文芸雑誌『新小説』に梶鏡花が小説「春暉」を発表した。この小説

に李賀の「劍客歌」2096(20740)が引かれている。明治は漢詩が盛んに読みられ、作られた時代だった。專門の漢詩人の中には李賀を讃嘆するものもあった。しかし李賀に対する見方は伝統の中で固定したところから出るものではなかつたようである。

「宮娃歌」は、賀の作品中ではいわゆる人口に膾炙する作ではない。それを読んで小説中に引いた鏡花の見識はたたえられてよい。またこの詩は鏡花の繊細纏のような文体にはしつくりはまつて異和感を覚えさせない。鏡花は怪奇な小説を書いた。賀にも怪奇な詩がある。しかし、鏡花は、怪奇を好みがりえに賀の詩を見出したのではなく、賀の詩を愛したためにその怪奇をもこのみ、やがてややその怪奇の方にのめりこんだのではないだろうか。

鏡花の小説の中に『法華經』の薬草喻品を引いていられるのがある。『法華經』は有名な經典で、法華の信者は教にするほどいるけれども、ほんとうにしみじみと全部を読み味わう人は多くはなく、まして薬草喻品を鏡花のような文脈の中にちりばめてみる人は稀だった。大海のような漢詩の中から李賀の一滴を汲み、高山のような法華から薬草喻品の一滴を拾つたかれは、日清・日霧の両戦に勝つて浮ついた明治びとに一般の成上つて粗鄙なものとは違つたまなざしがあつたような気がする。自らの意思によつて自らの位置をかええない草木的な人性への共感同悲がこの二つの引用に仄かに見える。鏡花も法華の信者だったけれども、高山樗牛や田中智学のような方向に進まなかつた。李賀は『楞伽經』を読み、そしてたぶん『法華經』をも読んだ。非情の金石が有情の人よりも深い感情をもつという発想は、薬草喻品に胚胎する。

鏡花はそのような理路をたどって李賀に到達したのではあるまい。共通した心情が時空を隔絶した西世界の一詩人を結びつけたといふべきだろう。この出会いこそ、二〇世紀がその百年に他の世紀の何十倍もの衝撃を受け、そこで、苦しみつゝ生きづづけなければならぬ人間に耐える力を呼びさますところのものであるだろう。

二〇世紀の李賀は、泉鏡花のおとおどとして頑固な、けんうんとして古風な、あのまなざしによって、まず聞かれるのだ。だが、いまでもなく、これは入口である。両者をあまりかたく結びつければ、この特異な二人の詩人に付してそれを失ることになるかも知れぬ。

伊良子清白

同じく一九〇六年の、しかし「春暉」よりは早い五月に、伊良子清白の詩集『孔雀船』が出ている。わすかに十八篇の、だがことごとく珠玉の作を収めた、めでたい詩集である。自らについてほとんど語ることをしなかつたらしいこの詩人は、また医師としての義務に従うために、この詩集出版ののち筆を止めて、後にまた詩を作ったがおおむね詩壇から離れていた。この人についての研究もほつばつ出ていろいろようだが、わたしはそれらを読んでいない。かれが李賀の詩集をもつたかどうかを知りぬ。しかし、わたしの感じではかれは李賀を読んでいたろうと思う。読んでいかないことが事実だとしても、読めば愛読しただろうと思う。

物の詩人に対比するなら、かれは庄田耕と李賀との間にあってやや前者に近いであろう。だが、「廻戻^{アラシ}に／秋風吹いて／河添の旅籠屋^{ロジヤ}さびし／哀れなる旅の男は／夕暮の空を眺めて／いと低く歌ひはじめめ」という「漂泊」の歌い出しが、賀の「將發」の「東林巻席罷・漫落將行去・秋白遙遙空・日滿門前路」へあづまだつ よやひ しなべて／とほとほと ひかむとするに／あきしスし そらはるばると／ひかけみつ かどりせのみら)3128(2072)に酷似する。「六月の飲食に／けた、まし虹走る」^{遠路にて}「鳥の丘^{カモリ}に／火は燃えべ」^{赤城山}の奇異は、相似たことばこそがより一層、李賀と李ににおいてつながるものを感じ、せぬ。そうして「夏日孔雀賦」の、微視的審視をつらねて長篇を形成する筆法は、賀の「幽谷草」3165(20809)のそれと軌を一にするといってよい。

やがにも記したように、清白が賀の集を読んだという証拠をわたしが持たぬ。もしかれば読んだとするならば、表に機微してまことけその真を失っている垂流、明治の漢詩人某けれどより、元の楊絛頤よりも、深く賀を理解した人といえるださう。

すゝと後の作品だが「子供の憂鬱」^{アーチ}という詩に、

のぐい蝶が
かしこい蝶になる

海邊の學校で

かしこい子供が憂鬱である

という句がある。清白の古調は、いまの饒舌を好み人達にはうとんぜられ、いや無視されている
ようになされるが、かしこい人の憂鬱は、いつの代にも理解しやくくないのかもしだれぬ。

田北湖

一九〇八年、清の光緒三十四年、『國粹學報』第四三期（第四卷六期）に「昌谷別伝并注」が
掲載された。筆者は田北湖である。わたしは田氏について、この外にも知らぬ、また掲載誌
も持たぬ。戦前か戦後かそれもはつきりせぬが、ノートに写した鉛筆書きの全文が、いま手もど
にある。写し誤った文字があるようで少しだらうが、『國粹學報』は新たに影印本が出ている
から闇文をもたれる方を見られるであろう。

田氏は前言に正史・私傳その他、賀に關する世に流布した詰説の、あまりあてにならぬことを
指摘し、賀自身の作品を第一資料として、かれの伝を検討し直した旨のべている。そして、自
らの宣言した方法をおみむね貫いている。過去の注家もその注の外々で、それを部分的にはやっ
ていた。しかし、李賀の生活の全部にわたってこれを実行したのは田氏が最初であろう。

考証は精粗相半ばするけれども、田氏がはじめて説き、あるいは確定したこととあげると次の
ようになるであろう。

* 李賀は唐の大鄭王の子孫である。

- * 贺の家臣の地は河南の山谷である。「龍因歌如」という魔、西は地望である。成紀もまた。
- * 羊の名を猶といつ。
- * 「高軒過」は賀の十八歳の作であり、伝説の「二十七歳の作ではない」。
- * 元和以前に父の死にあつた。
- * 贺の官は奉礼郎で終り、協律郎にはなっていない。
- * 贺の臨終駢天詩話に、賀の母の悲しみを慰めるための作爲である。
(押亥九月十五日)

▲雅記・35▼

唐太宗補遺

清の沈炳翼の『續唐詩話』卷一、太宗皇帝のところに、「瀛奎律體」の語をいく。

唐太宗既得天下盡修詔史圖書南北史及八代史集之而註諸經令諸強贊也其有功於後世者甚大不止一時混合軋文而已作詩亦足壓倒一時文人學士及天下能言之人焉不心服詩體源流陳隋多異前六句述景末句乃以情終之太宗秋日二首亦是此體其云霞碎結綿高天繡宇甚妙山谷秋入園林花老眼乃是如此下字李賀趙甲尋風生眼縛亦出此

賀の句は「蝴蝶集」3152(20796)6 第二句。ただ一句だけれども、太宗と李賀の詩の類似に、古人も気づいていた。

なお、「山谷」この詩題は、「全唐詩」には見えず、「秋入園林花」は逸句らしい。(九月十日)

第四号 四三頁 5行 变屈 編屈と訂正。
 第五号 九頁 7行 それだけならは、それだけならばと訂正。二八頁 14行 しばしは
 ばしばと訂正。四〇頁 10行 行末の空格一字にあやまり。

見

題

董森紳一氏「宮町時代の李賀」(レジューム)「江戸時代・李賀關係資料彙編」。杉本秀太郎氏「日本小説をよむ令和報」¹²⁶¹²⁷「ふうんす」昭46・9。原田禹雄氏「宮古のらいとその対策」「愛生」昭46・1・9。和田利男氏「漱石漢詩の引用について—江藤淳氏の著作から—」。中山留恵子氏「日本歌人」¹²⁵。上原淳道氏、二千円へ學術団体あるいは芸術団体としての方向社に方向。「李賀研究」などの発行者として(当谷雅子氏「夏休」(詩集)、小高根二郎氏「黒樹園」¹²⁴—¹²⁷。土江澄男氏「四大文学」¹²⁸。

後

記

本誌は創刊以来、読者の厚い支持を得、はじめの目標の隔月刊を実行することができた。やうして読者数も号を追って増加している。これはわたしにとって全く予想外の喜びである。読者諸賢の批判と示教をお願いする。批判をえてわたしの歩みもわざかずづながら前進するようである。本号をもって本来院日曉上人・玉琴水子の各命日を紀念する。